

## 臨床倫理メデイエーション

国立大学法人山形大学医学部  
総合医学教育センター

准教授 中西 淑美

66

人は何で生きるか―非戦論者トルストイの民話から

はじめに

2022年春、ロシアがウクライナに侵攻し戦争が勃発した。戦争の終結と平和はいっ訪れるのか。1年半にわたって戦闘状態は続いている。

周知のとおり、ロシア文学を代表する作家として、19世紀ロシアが生んだレフ・トルストイは、「戦争と平和」、「アンナ・カレーニナ」、「復活」を著した高名で偉大な知識人である。レフ・トルストイ（レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ、1828―1910）は、反戦論者（戦争に反対）ではなく、絶対的な非戦論者（戦争そのものを否定し戦争が無くなることを強く求める）であった。

本稿では、その作品の多くに、非戦・非暴力

主義を説く、1880年代以後のレフ・トルストイの作品のうち、「人は何で生きるか」という、教訓的主張のある一連の短編のなかの民話のひとつを紹介する<sup>1)</sup>。

## 1. トルストイと時代背景

レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ（以下、トルストイと称す）は、帝政ロシアの小説家、思想家で、フョードル・ドストエフスキー、イワン・ツルゲーネフと並ぶ、19世紀ロシア文学を代表する文豪である。祖先は父方も母方も歴代の皇帝に仕えた由緒ある貴族で、伯爵家の四男として生まれた。トルストイは、1853年のクリミア戦争では将校として従軍し、激戦の

中に身をおき、その後、その戦争体験が、のちの非暴力主義を展開する素地ともなった。

1854年から1871年は、穏やかな時代とはとても言えず、5つも戦争があった。第一はナイチンゲールの看護で有名なクリミア戦争である。これは、衰退するオスマン帝国に対して、ロシアが利益を得ようとするのを、イギリス・フランスが阻止しようとした戦争である。他の4つの戦争は、イタリアとドイツの統一に関連した戦争であった。各国の政治指導者たちは、既存のルールを廃棄し、各々に都合の良いように合わせて、ナショナリズムを手段として使うようになっていた<sup>2)</sup>。クリミア半島は、黒海の北側から南に大きく突き出したウクライナ南部にあり、戦略上重要な拠点として何世紀にもわたって戦争が続いてきた歴史がある。列強の勢力争いを背景に、ロシア帝国の崩壊後はソビエトに引き継がれ、1954年にソビエトの当時の指導者フルシチョフが、クリミア半島の帰属をロシア共和国からウクライナ共和国に移管。しかし、1991年にソビエトが崩壊しウクライナが独立すると、ロシアとウクライナの間に帰属をめぐる対立が始まり、現在のロシアによるウクライナ侵攻の戦禍につながる。

さて、トルストイの生きた時代背景に話を戻すと、19世紀時点のロシアの人口の大部分が農民であり、都市人口の割合はごく一部だった。家内奴隷も存在し、農奴として人頭税を課したり、地方長官の腐敗による弊害が多かったりと社会的不平等の時代であった。貴族領主に人格的に隷属させられた農奴は全農民の半数近い約2300万人が存在しており、敗戦を契機に、諸悪の根源と見なされた農奴制への非難が強まった<sup>③</sup>。その後1861年に農奴制は廃止されたものの、解放から暫くの間、農民の生活は一層苦しくなり、農奴解放令の内容に不満を持った農民の暴動が各地で引き起こされていた。このように、トルストイの生きた時代は、社会矛盾が激化していた緊張の時代背景であった。

## 2. 民話のはじまりと民話が語ること

貧しい靴職人のセミヨンは、自分たちの家も土地も持たない農家で間借りをして生計を立てている。日銭は、毎日の食費に消えてしまい、ロシアの寒い夜には必需品の毛皮外套（以下、シューバと称す）も夫婦共用の1着しかなく、しかも、それは着古してポロポロだった。セミヨンは毎日靴

の修理の仕事はあるのだが、代金の不払いの注文が多く、仕事をすればするほど貧しくなっていくありさまで、セミヨンとマトリョーナの夫婦は常にひもじい思いをしていた。ある日、セミヨンは流石にポロポロの古着になったシューバを新しく買いに村に出かけた。しかし、毛皮屋にも信用されず、後払いでは売れないと拒絶され、シューバを手に入れることはできなかった。自棄になったセミヨンは、シューバを買うために回収した靴の修理代をすべて酒代に使い果たしてやけ酒を飲み、不平不満を口にしながら家路につこうとした。その道中で、礼拝堂の陰に、何か得体のしれない「白いもの」があることに気がついた。それは、裸の男で、生きているのか、死んでいるのかわからないほど、身動きもせず、お堂にもたれかかってすわったままだった。靴屋のセミヨンは、恐ろしくなり、「かわりあうと厄介なことになる」と思い、そのまま通り過ぎようとした。

その時、ふと振り返ると、裸の男が何かをじっと見つめている様子だった。セミヨンは踵を返して、足を早めて立ち去ろうとした。と同時に、突然、ある心臓の音がセミヨンに聞こえた。

「おい、セミヨン、そりゃ、いったい何のまねだい？」とセミヨン自身に語りかけてきた。

「人が災難に遭って死にかけているのに、おまへは怖気ついて通り過ぎようとするんだね（中略）」

「おい、セミヨン、いけないぞ！」

男は、見たところ、乱暴者でもなさそうだし、言葉つきも柔らかかで、何より印象的だったのはその眼差しだった。セミヨンは目が合った瞬間から、

この男のことが気になってしまった。（中略）

「きつと悪い奴らにいじめられたんだらう？」

「いえ、だからもういじめられません。神様から罰を受けたのです」

とうとう、セミヨンは、自分が着ていたシューバの古着を男に着せて、家に連れ帰ることにした。

ただ、気になるのは、寒くてお腹を空かして待っている妻のマトリョーナの反応だけだった。

新しいシューバを買うための仕事の対価の集金もできず、後払いを望んだシューバも買えずじまいで、おまけに、わずかに回収できた修理代金は、

セミヨンのやけ酒に消えてしまっていた。そのうえ、見知らぬ裸の男を連れ帰るとなれば、妻のマトリョーナがどれだけ怒るか想像できたからである。

案の定、マトリョーナは激怒し、セミヨン夫婦は、激しい非難の言葉を浴びせあった。事情も話せず、口を挟ませてくれないほど、マトリョーナは、お人よしの夫に腹を立て、「晩飯なんかあ

りませんよ。裸の酔っぱらいをいちいち賄えるもんか」とまくしたてた。

しかし、夫が連れてきた男の苦し気な様子を一瞥すると、マトリョーナに、小さな変化が起きた。その男は、腰掛の端っこに腰を下ろしたまま、じつと動かず、両手を膝に置き、頭を胸に垂れ目は閉じたまま、何かにのどを締め付けられるように、顔をしかめ続けていた。

マトリョーナが黙っているの、セミヨンが言った。

「マトリョーナ、おまえの胸には神様がお留守かね？」

この言葉聞いたマトリョーナは、もう一度見知らぬ男を眺め、それから夕飯の用意に取り掛かった。

取って置ききのパンの端っこを持っていき、「さあ、おあがり」といったマトリョーナをみて、セミヨンは、見知らぬ男を引っ張って、「さあ、若い衆、こっちへお寄り」と言い、彼は、パンを切り、細かくちぎって、それから、二人で食事をはじめた。マトリョーナは、片手で頬杖を突きながら見知らぬ男を眺めた。突然、見知らぬ男の表情が晴れ晴れとなって、しかめ面が消え、目を上げて、マトリョーナを見ながら、微笑んだ。以下略。

原作は、キリスト教の信心の民話の態をなしているため、単純に、貧しい民が良心により、その生を豊かなものにしたという表面的な物語として受け取られる可能性がある。しかし、この民話は、その表面的な宗教的な主張ではない。自身との対話から、人間の生と死、愛、平等、相互行為について考えさせる倫理的問答である。トルストイは、生きるうえで、かけがえがないものとは何か、ということについて、さまざまな大切なたくさんの気づきを与えてくれる。それは、「良心をいかせ」というようなことではなく、もっと深い、現実とは、「目に見える外的世界と、われわれの内なる世界」の二つの世界で構成されており、その間にある壁を作っているものは何かということ、やさしい民話の形で説いているのである。

この見知らぬ男は、ミハイル（ミカエル）という天使だった。物語の中で、ミハイルは三度微笑む。その微笑は、共に生きることの大切さや、支えることは、逆に支えられることであると考えさせ、そして、それは相互交流・意味の価値が起きた時に見られるのである。この天使について、セミヨン夫婦は全く気づかず、この先に起こることが、セミヨン夫婦の貧しさを豊

かさに転換していくことになる。

民話の中で出てくる、ある心の声とは、良心と呼ばれるものである。人は全員が豊かでありたいが、そうなることはなかなか難しい。貧しい人、恵まれない人、傷ついた人たちは、それぞれの環境下で、陰性感情を生み出すが、その与えられた環境下で生きていくのはなぜなのか。無一文の裸の男を連れ帰ることが普通では考えられず、ただのお人よしで済まされるのか。

それは、人助けであり、日々の労働であり、自らの心の支えとなり、慈愛や関係性につながることもあることを静かに気づかせてくれる。現実の世界で、頭で考えられることとは異なることが、日々起きうること、われわれに必要なことは、現時点では、外的世界は、われわれには考えられない姿や形をしているかもしれないということを示唆してくれる。つまり、裸の男を助けたつもりが、実は助けられ、支えたりが実は支えられているといった、考えていたことは異なった状況が創り出されるということに気づかせてくれるのである。現実の一つであるが、事実はいくつもある。時の流れや人や世界のありようによって、現実には多様に創りかえることができるともいえよう。

## 3. 天使ミハイルの体験が語る真理

トルストイは、天使ミハイルを登場させているが、そこには、天使の体験を通して、人間の本質を導く三つの質問から、人間の三つの本質について語っている。

一つ目は、「人の中に何かがあるのか？」であり、そこには、「人には本質的な愛（良心）がある」とする。

二つ目は、「人に与えられていないものは何か？」である。それは、「人は死を自覚できない」ということである。

三つ目は、「人は何で生きるか？」である。この民話のタイトルでもあるが、人にとつての労働や社会は、目に見える外界と内なる世界をつなぐ壁や境界をつくるけれども、それは、自分と他者をつなぐ何かを育てることによって、慈愛が開花するという。

人が生きるのは、生物学的な生は前提にしても、「人がその生きる時のみ幸福を感じられる」からである。どんな状況でも人は一人で生きていくのではなく、人は、外界との交流の中で、内なる世界を交流させながら、生きているのである。

つまり、「生きるとは、死に行くことであり、生きるとは生かされていることでもある」<sup>(4)</sup>。

セミヨン夫妻は、貧しい暮らしの中で、心も貧しくなっていたが、天使ミハイルによって、二人の内なる世界にある、温かいものがよみがえるのを読者に見せている。ここで、トルストイは、「人の中には何かがあるのか」に光を当て、ミハイルの言葉で、「人の心には愛があるのだ」と言わしめる。

人が、生きていくうえで、かけがえがないことを探そうとするとき、「外界にある目に見えるものではなく、われわれの中にある内なる世界を見よ、大切なことを見過ごしてはいないか」という、欲や悪を超えた、生と死とのあいだにある「愛」という壁を見よ、という真理が見取れる。

ロシア・ウクライナの戦禍が止まない今日、人の内なる愛の種子が息を吹き返してほしい。

「人は一年先のことまで心配するが、日暮れ前に自分が死ぬことも知らないのだ」と、ミハイルは説く。

いのちの働きとは愛があることであり、人生の実相を照らす叡智である。

## おわりに

愛という言葉が勢いを無くし、科学の発展や感染症が直接的な触れ合いを減じている現代こそ、「人は何のために生きるのか」を問いたい。それは、「いのちといのちをつなぐことの大切さ」である。

戦争で死ぬことほど無駄で悲しいことはない。偉大な文豪トルストイは、「戦争に真実はない。真実は平和の中にこそある」という戦争の残忍性を、今も訴え続けているのである。 ㊦

## 参考文献

(1) レフ・トルストイ（著）、北御門二郎（翻訳）『人は何で生きるか（トルストイの散歩道）』、あすなる書房、2006

(2) ジョセフ・S・ナイジュニア、デイヴィット・A・ウェルチ（著）田中明彦・村田晃嗣（訳）『国際紛争（原書第10版）―理論と歴史』、有斐閣、2021

(3) 鳥山成人『スラヴの発展―文藝春秋（大世界史（第15））』、1968、328頁

(4) 若松英輔、竹内薫、中山智香子、木ノ下裕一（著）『Forティーンズ2022年8月（NHKテキスト）ムック』、NHK出版、2022